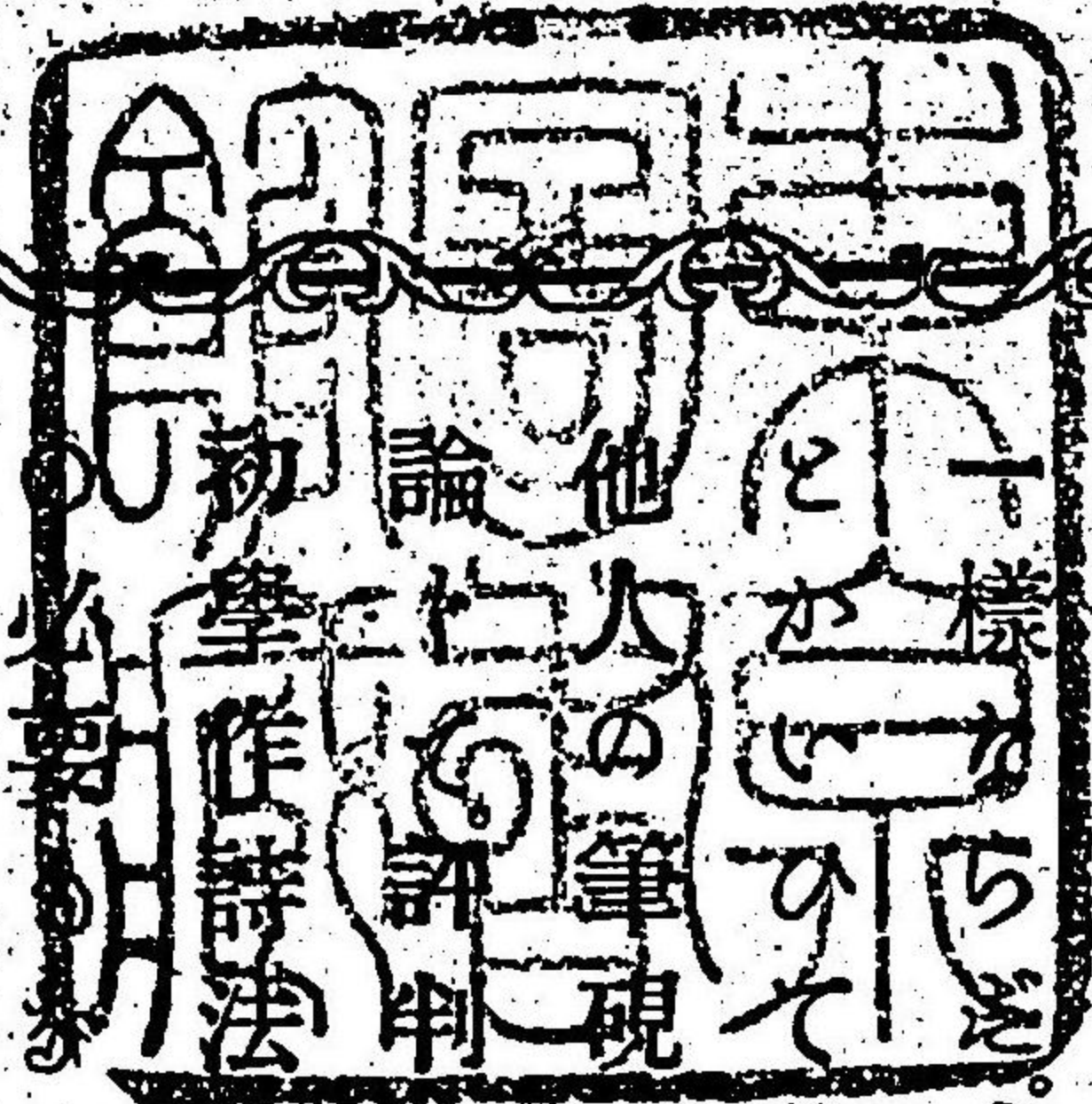


167
305

初學作詩法

初學作詩法自序

序はかほ緒の如きあり。されは緒なきの糸は
きの書はなし。然もとも其かきつくることに至りては



一様からぞ。或は詩法と説きたるとか。文則と論とたる
とがいはひて。其書中の次第と簡短に示しあるあり。或は
他人の筆硯を借りて。其書の機能を説き。其書の価値と
論やの批判記やうのものもあり。されども此書は己に
初學作詩法と題したれば。其上別に此書の次第といふ
の必要もなく。又批判記は新聞紙などの廣告にて事足
りぬれば。敢て他人の筆硯を勞するの必要もなし。さ

は予は此書に序すべしこととはこれかと思ひ定めぬ。
 さきとも緒なきの糸はあきに。序あきの書あるはあま
 り異様のへ。別に序すべしこととはあき故を序べて序と
 はあしぬ。明治二十六年二月二十日後藤樂山とるす。

凡 例

- 一 此書の曾て予が郷里にありし時。門人に講説せし筆記を斟酌折衷し
 たるものなれば。其意を達したる迄にて其語を飾らず。されば此書を
 見る人。其語の拙きを以て其意を捨る事なきを望む。
- 一 曾て本閣に於て出版せる。予が著の作詩自在の。稍高尚に過ぎたれば
 初學の人は咀嚼するに苦まんふとを慮り。今又此書を出版したるな
 り。
- 一 作詩自在の中に就て。初學に適したる個處の。此書に摘載したるもあ
 り。
- 一 書中主眼の所には。圈点を施し。又や、解しがたき詩に。註釋を加へ
 などし。飽まで初學の好師たらんことを勉めたり。
- 一 本閣は曾て作詩自在の巻頭に於て。本閣の出版の擧げ之に止まるに

凡例

- 一 此書の曾て予が郷里にありし時、門人に講説せし筆記を斟酌折衷したるものなれば、其意を達したる迄にて其語を飾らず。されば此書を見る人、其語の拙きを以て其意を捨る事なきを望む。
- 一 曾て本閣に於て出版せる、予が著の作詩自在の、稍高尚に過ぎたれば、初學の人は咀嚼するに苦まんふを慮り、今又此書を出版したるなり。
- 一 作詩自在の中に就て、初學に適したる個處の、此書に摘載したるもあり。
- 一 書中主眼の所には圈点を施し、又や、解しがたき詩に、註釋を加へなどし、飽まで初學の好師たらんことを勉めたり。
- 一 本閣は曾て作詩自在の巻頭に於て、本閣の出版の擧げ之に止まるに

は予は此書の序すべきことはこれありと思ひ定めぬ。
 さきにも緒なきの糸はふきに、序なきの書あるはあま
 り異様ゆへ、別に序すべきことはふき故を序べて序と
 はかじめ、明治二十六年二月二十日後藤樂山とるす。

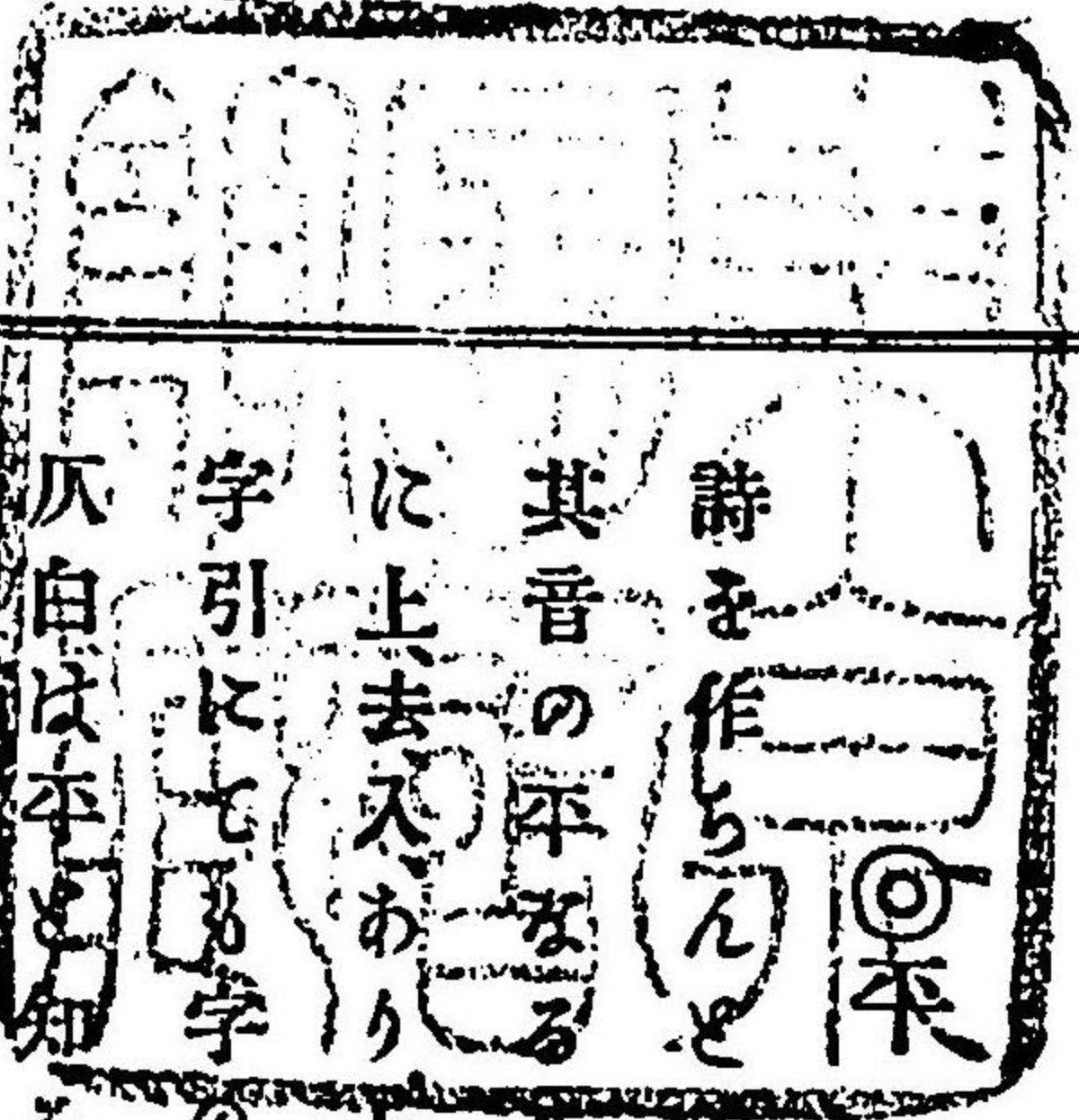
あらざれば。又初學の金條玉科となすに足るものを得ば。直に梓に上
 さんことを約したりしが。此書の如きは即ち其一なり。之を以て又本
 間の空言虚辞世を欺き人を負くの流にあらざるふとを知るに足ら
 ん。

明治二十六年三月

編者識

初學作詩法

東都 後藤樂山 著



詩を作らんと心掛くる人は。第一に平仄を知らざるべからず。平仄とは
 其音の平なるものを平字と云。其然らざるものを仄字となす。仄字の中
 に上去入あり。上聲去聲入聲と平聲とを併せて四聲と云へり。如何ある
 字引にても字の傍に黒圈白圈のあるは。これを示したるものにて。黒の
 仄白は平と知るべし。この仄と平と相錯りて曲をなすものなり。

◎押韻

又詩を作るに。只に平仄のみにて。事行ふぬなり。平仄の外に押韻と

いふふとあり。韻は固より自然に出て自然に分れたるものなれども。後の世にては稍々其自然を失ふこと、なりたれば。韻書といふものありて。其制規を脱れぬやうにせしむること、なりたり。只入聲此字のみは知れやすし。傳へて云へる語にフクツチキあ平聲なしとあり。其音尾れフクツチキなるときは仄字なるあり。例之へハ法、織、切、匹、式ハ皆入聲なるが如し。韻字の數は凡ろ百六にて。内平韻三十。仄韻七十六なり。其平韻のうちよある字ハ皆平字にて。仄韻のうちにある字ハ皆仄字なり。

上平聲

- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 一東 | 二冬 | 三江 | 四支 | 五微 |
| 六魚 | 七虞 | 八齊 | 九佳 | 十灰 |
| 十一真 | 十二文 | 十三元 | 十四寒 | 十五刪 |

下平聲

- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 一先 | 二蕭 | 三肴 | 四豪 | 五歌 |
| 六麻 | 七陽 | 八庚 | 九青 | 十蒸 |
| 十一尤 | 十二侵 | 十三覃 | 十四鹽 | 十五減 |

上聲

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| 一董 | 二腫 | 三講 | 四紙 | 五尾 |
| 六語 | 七麌 | 八霽 | 九蟹 | 十賄 |
| 十一軫 | 十二吻 | 十三阮 | 十四旱 | 十五潛 |
| 十六銑 | 十七篠 | 十八巧 | 十九皓 | 二十哿 |
| 二十一馬 | 二十二養 | 二十三梗 | 二十四迥 | 二十五有 |
| 二十六寢 | 二十七感 | 二十八琰 | 二十九賺 | |

去聲

- | | | | | |
|----|----|----|----|----|
| 一送 | 二宋 | 三絳 | 四寘 | 五未 |
|----|----|----|----|----|

六御	七遇	八霽	九泰	十卦
十一隊	十二震	十三問	十四願	十五翰
十六諫	十七霰	十八嘯	十九効	二十號
二十一箇	二十二禡	二十三漾	二十四敬	二十五徑
二十六宥	二十七沁	二十八勘	二十九豔	三十陷
入聲				
一屋	二沃	三覺	四質	五物
六月	七曷	八黠	九屑	十藥
十一陌	十二錫	十三職	十四緝	十五合
十六葉	十七洽			

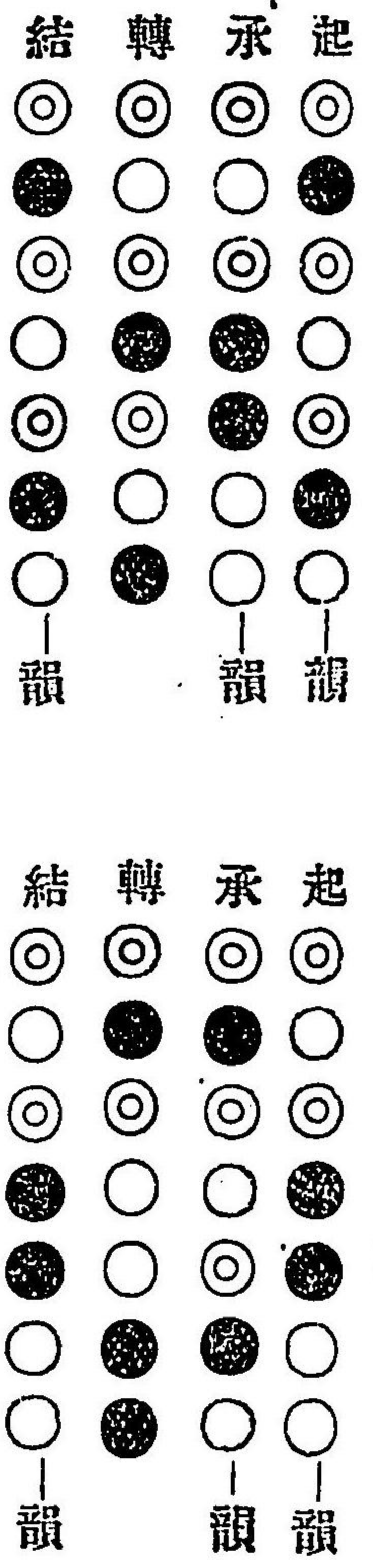
◎七言五言絕句作法

已に平仄と韻とを知れば、それを格式に合せて字を綴り意を通すべし。

これを詩といふなり。かく平仄相錯り韻をも押しして初て歌ふことも出来詠するもとも出来るなり。若し平仄にも構はず韻にも順着せざる時、只字を並べし迄にて曲をなさざるゆへ、歌ふ事も詠する事も出来ぬなり。其格式れうちにて先づ初學の尤も入り易きは七言絶句なり。

仄起

平起



○ハ平仄何れを用ひても好き處と知るべし。これに繼ぎて五言絶句なり。五言絶句は實ハ甚だ六ヶ敷ものなれども、字數少きゆへ初學のほどハ作りやすき様おぼゆるなり。

仄起

起 ○●○○○●

承 ○○○●○—韻

轉 ○○○●●

結 ○●●○○—韻

平起

起 ○○○●●

承 ○○○●○—韻

轉 ○○○●●

結 ○○○●●—韻

初學の人詩を作らんと思はゞ先づ必ず書籍によらざるべからず。特に簡易なる詩學便覽の如きものをよしとす。これを見て其書中の文字を集めて作るべし。作る中にも常に平仄と韻とを誤らぬやう心かくべし。例之ハ春日郊行といふ題の詩を作るに當り蝶や鶯と共に彼處此處を歩さまはるといふまどを初めに云はんと思はゞ。○●○○●●○の處なれば伴蝶の字と隨鶯の字と弄物華の字とを集めれば忽ち伴蝶隨鶯弄物華の句となるべし。かくの如く跡の三句をも拾ひ集めて綴るべし。

之を綴るには必ず華ハ「麻」の韻の字なるにより華と同じ麻の韻の中の字を句末に用ゆべし。之を韻を押すといふなり。尤も轉句ハ前に示せる如く韻を押さぬなり。又春曉の詩を作るに當り霞が天の一方にあたりて赤く見ゆるといふことを云はんと思はゞ。○●○○●●○の處なれば霞暈と紅浮と一角天との字を集むれば忽ち霞暈紅浮一角天の句とはなりぬべし。初のはどのかく書中の文字を集めて句をなすへし。日をふるまゝに自ら我思ふ如く。平仄も韻も些程苦しとも思はず。すらすらと出來うるやうになるべし。五字なり七字なり四句あて一首の詩をなすを絶句といふ。此四句の中にて前にも示せぬ如く。初の句を起句といひ。次の句を承句といひ。三の句を轉句といふ。終の句を結句といふ。

◎絶句体

絶句の中み種々の体あり。常体といひ。前散後對体といひ。前對後散体と

いふ。又四句兩對体あり。隔句扇對体あり。常体あり。

除 夜

陳 簡 齋

一杯歲酒莫留殘。坐看新年上鬢端。只恐梅花明日老。夜瓶相對不知寒。
にて尋常皆みれなり。又前散後對体あり。

春 夜

蘇 東 坡

春宵一刻直千金。花有清香月有陰。歌管樓臺
歌は詠なり。管は樂器なり。聲
細々。鞦韆院落。鞦韆は繩戯の事。鞦韆
院落の繩戯をする家。夜沈々。
にて轉結れ二句は語の相對したるをいふなり。前對後散体あり。

感 舊

陸 放 翁

驪鞍送客双流驛。名銀燭看花万里橋。地三十二年真一夢。並篋寒雨夜
蕭々。
にて起承れ二句の語に相對したるといふなり。其他の体はあまり作例

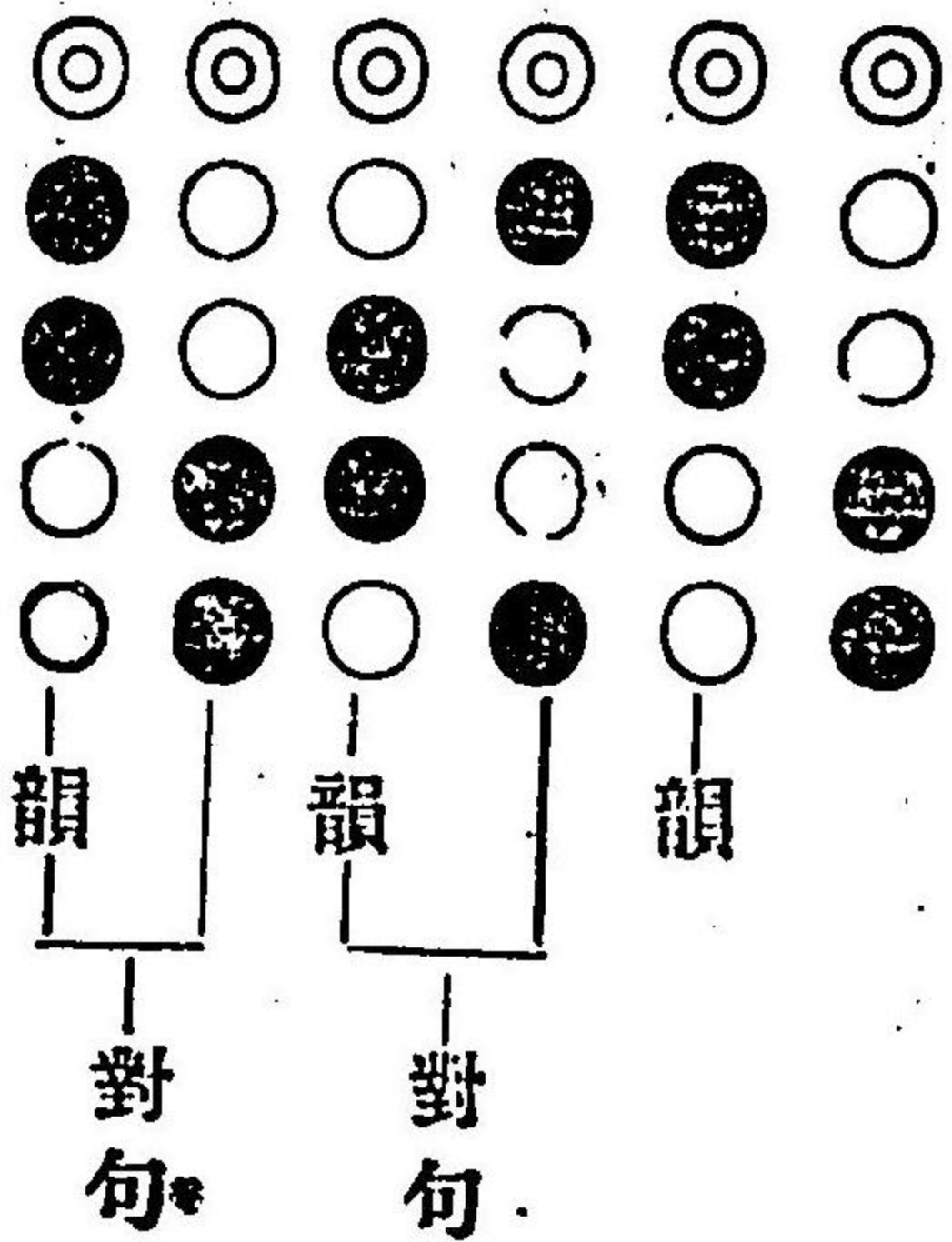
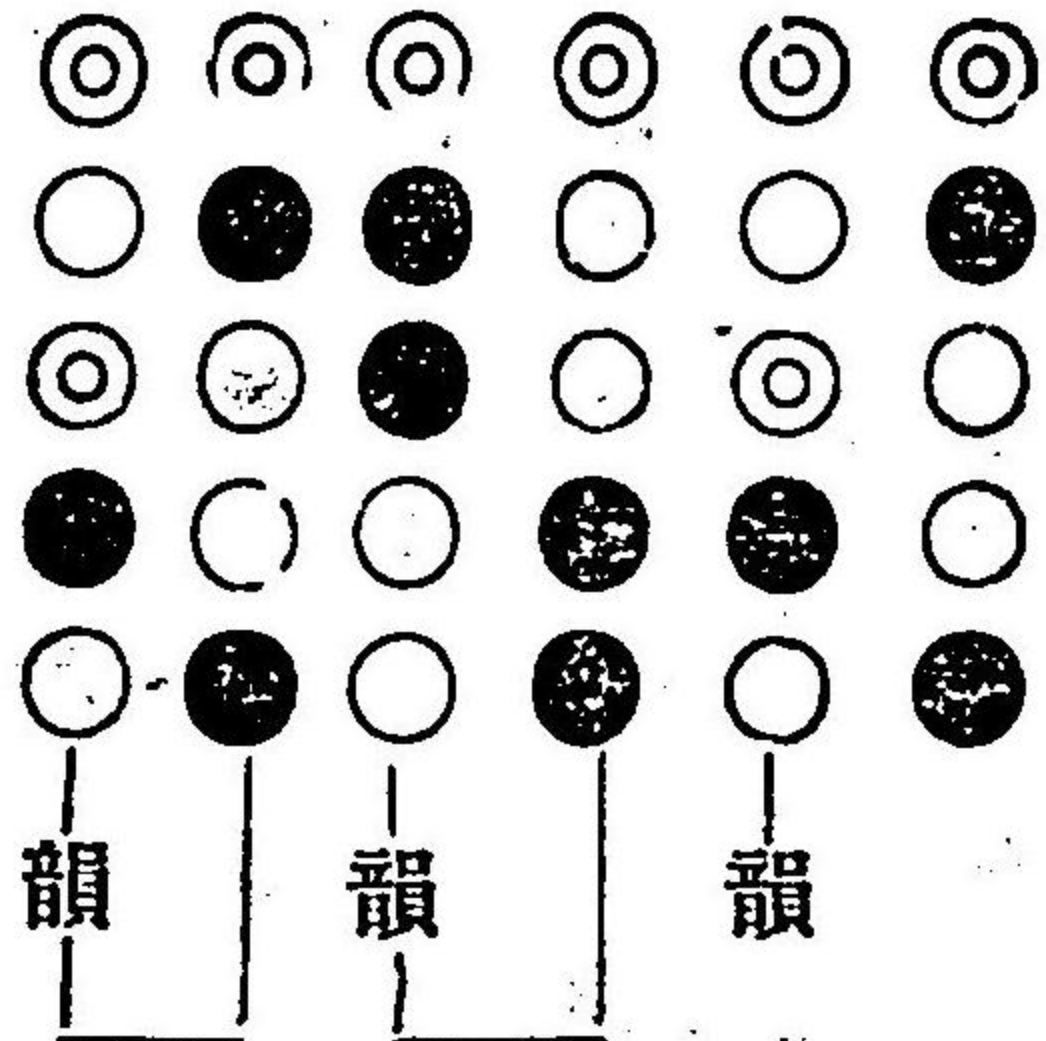
も多からず。從て作る人も少く。且六ヶ敷ゆへこゝに其例を示さず。已に
少しく詩に通したらんには他書に付て曉るべし。

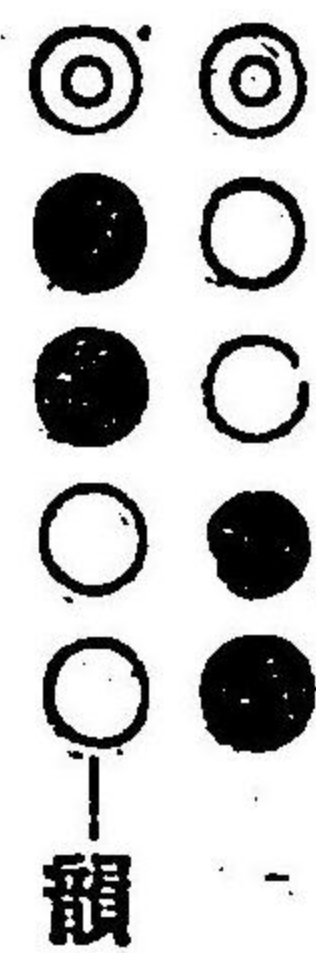
◎五言律七言律作法

已に絶句を幾度も作りてや、慣れ得たらんには律詩を學ぶべし。律詩
は必ず八句あるをいふなり。律にも亦絶句と同じく五言七言あり。

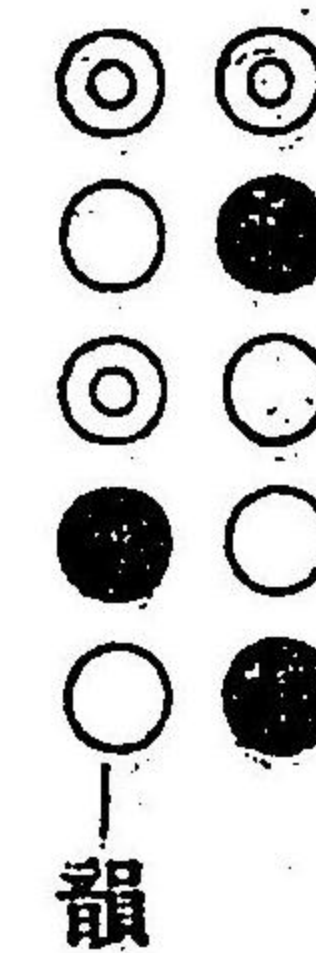
五言仄起

五言平起

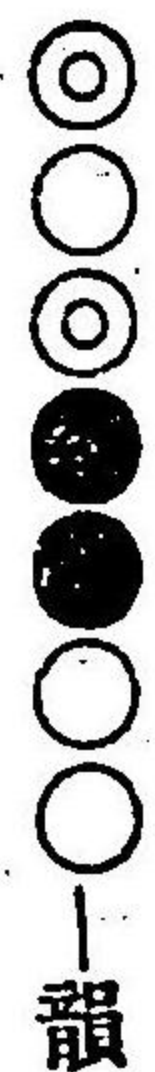




七言仄起



七言平起



律の一二の句を破題といひ三四の句を領聯といひ五六の句を頸聯と

いひ七八の句を繳結といふなり。圖中對句とあるは前にもいひしが如く其語を對するをいふなり。喻へは天地といへは日月といひ花葉といへば草芽といひ蕭々といへば颯々といひ白梅といへば綠柳といひ春水といへば秋山といひ彷徨といへば放曠といふが如きなり。律詩も常体以外に八句全對体八句四對体八句不對体隔句扇對体あり。蜂腰格偷春格ありされど律詩は稍々高尚のものなれば初學の耳に入りがたからんことを思ひて其例を示さず。絶律の外に排律古詩樂府等あれども今こゝを示さず。已に絶律に練磨を積みたる上は他の書籍につきて學ぶべし。

◎題と趣向

詩を作らんと思はば必ず古人の詩をよまざるべからず又古人の詩を讀みて其心を得ざるべからずもし其こゝろを得ざるときは多くの書

を繕きたりとも。古人の跡をふみ。古人の堂に昇ることは能はざるべし。されども。古人は詩をよみ其心を悟り其よしあしを判つはなかく。六ヶ敷ことなり。各自ら悟る所は深きと淺きとによりて。其見る所の高きと下きとあり。喩へば。圍碁をみるが如し。名人の碁を傍よりみるも。我碁はどならずでは其圍む手のよしあしを知り能はぬと齊しかるべし。されば。強て好惡を判つには及ばず。唯字面の大義を辨へてやみぬべし。詩の進むに隨て自然と好惡を可からず得べし。又詩話などを見て。古人のよしと評したる句を味ふも宜しからん。唯其見る所の境によりて其趣を得。其題によりて其心の用ひやうを尋ぬべし。

羈旅の詩は見る處の景色をうつる。逢ふ處の感情をのぶべし。猶其景情の際に旅泊の凄しき趣を寫し得たるこそよけれ。温庭筠といへる人れ早行の詩に

雞聲茅店月。人跡板橋霜。

茅店の上に月影が残りたるとき雞がなき出し。板橋は霜の寒き上に人の渡りたる足跡が見ゆるとあり。又送僧に

燈影秋江寺。蓬聲夜雨舡。

秋江の寺の邊を過れば。かすかに燈の影がほのめき。夜雨の舡にのれば。蓬の滴がさびしくさこゆとなり。何れも能く旅中の曉かたのさびしき風景。夜半は物すさき様をうつしたるものなり。此等を見合すべし。

送行の詩は先づ名殘を惜む心を本旨として。羈中の景をも寫すべし。轉愈が送行に

飲中相顧色。送後獨歸情。

今友に別れんとて酒宴を催せども。此を別の限と思へば盃をあぐる間にも。互に顔を見合せて。何となく愁を含む。また別れざるどき。たよかや

うなるを。况して別を送りて獨りすこゝと歸る情は。如何ばかり耐へ
がたからんど。かねてより案じ置くとなう。此の専ら情をのべたるなり。
又同じ題并詩に。

住接猿啼處。行逢厂過時。

姑く住る處にては猿の啼く聲を聞て涙を落し。又立出て行く時よは、厂
の飛ぶをみて愈故郷を戀しく思はるならんと。旅中の物うさを推え計
りたるあり。同じく景を寫すにもかくいふを佳とす。

閑適[○] とは其見る所の景の我心に適ふをいふ。可成風致あるを宜し
とす。孟浩然が詩に

竹引携琴入。花邀載酒過。

竹は琴を携へて入る人を引き。花は酒をもちて過ぐる客を邀ふとあて。
つまり我庭には竹もあり花もありて風致をなせるのみならず。琴を携

へ酒をのせて來る風流人もありて。殊更お風致ありとの事なり。實にも
閑適とみそきこゆれ。

幽野[○] とは江村田家などの景色の幽なるをよく寫しうるを専らと
す。同じ景色にても寫し方によりて。幽にもなり野にもなれば。よく心を
用ゆべきなり。祖詠か詩に

簷前花覆地。竹外鳥窺人。

花が簷前を覆ひたるよ。又竹外より鳥が人を窺ふと作るが如きなり。
懷古[○] の詩は古寺、古宮、古戰場などの舊蹟に行きたるとき。古昔の事
を懐ひ出して作るなり。最も古を慕ふの情を述べ。又は今の物淋き景な
どを寫すべし。杜牧之が詩に

江山九秋後。風月六朝餘。

と作りたるは懷古の心尤も深し。江山の邊を見れば。九秋の後にて木の

葉も落ち水もかれて物淋しく。風月を愛して立とまれば。六朝の跡の荒果たる餘にて。唯感慨のみ起るとなり。江山風月は昔に易らぬ物なれども。九秋の後といひ。六朝は餘といひて。帳まじき体をのべたるなり。これ等をまなぶべし。

閨情の詩は情を深く作るをよまどす。又景をのぶるにも其中に自ら情のこもるを專とす。されどもあまりに情の現はるゝに却て詩の味の淺きものなり。樂ども淫せず。怨めども譏にいたらぬやう心かくころよけれ。權徳輿が詩に

落花人獨立。微雨燕双飛

落花の頃唯一人すこゝと。好む折柄。微雨にぬれて燕は雄雌か飛びゆくを見て羨みたるあて。句も意も實によま。寫景には種々あり。或は濶さを寫すあり。遠さを寫すあり。或は直に

寫すあり。婉て寫すあり。濶さをうつすとい。李白が

天晴一厂遠。海濶孤帆遲。

天が晴れ渡りて一羽の厂が遠くお見え。海が濶く去て一艘の帆掛船の來るが遅あとなり。又暢堂が

天勢圍平野。河流入斷山。

天が平野を圍むやうお見え。川が山の斷えたる所に流れ入るとなり。是等ハ濶さをうつしたるなり。遠さを寫すとい。承慶が

山遠疑無樹。湖平似不流。

山が餘に遠きゆへ。樹かなさやうに見え。湖が平にして流れぬやう見ゆるとなり。又雍陶が

曉煙平似水。高樹暗如山。

曉れ烟が一面又糊引て水れ如くに見え。高樹の森々と茂りたるが暗く

して山のやうに見ゆるとなり。此等は遠きをうつしたるなり。直に寫るとい。其見る處の景色を直に作意を付すまで寫となり。岑參が

江村片雨外。野寺夕陽邊。

の如し。江村か片雨の外に見え。野寺が夕陽の邊にありとにて。只見る所は景を其儘に述べたるなり。片雨とは此處は晴れて彼處は降るをいふ。乃ち時雨なり。婉げて寫すとは。見る處を直に寫さず。別な趣向を付けて作るなり。飛熊が

浦轉山初尽。虹斜雨半分。

の如し。浦を廻て今迄見えし山も見えずなり。虹が斜に掛りて彼方は降り。此方は晴となりたりとみて。趣向を付けて見るところをうつしたるなり。

題に付きて趣向の付方の大略は前より述べたる如くなれども。其簡易を

るもれに過ぎざれば。其餘は推知すべし。

◎妙境佳境眞境

錢起が句に

曲終人不見。江上數峯青。

王荆公が句に

春色惱人寐不得。月移花影上欄干。

柳子厚が句に

日午獨覺無餘聲。山童隔竹敲茶臼。

錢起此句の曲が終て見れば當り人も居らず。只江上に並立つ峯が青きばかりとなり。王荆公が句の春の夜のあまり長閑げさに寐難き折柄月が花影を移して欄干にのぼるとなり。柳子厚の句の日午眠がさめて聞けば。童が竹の向にて茶臼を敲く音ばかりして。外に何の響もなしと

なり。何れも字面に顯れたる如く。別ふ意味はなきあり。されども錢起の江上に數峯青きは。其境の妙なるもこれにあらすや。其境の妙と想の妙とが合して妙句となるなり。其境の妙と想の妙が合するとは。喩へば茲に一点の漁箒が遠くの汀に見ゆるを。一人は只一点は漁箒と見たるはみにて別ふ想をつけず。又一人は妙趣ありと見て。一点漁燈落遠汀と句を案し出したらんには。則其境の妙に想の妙が合したるにて。前の人然らざる也。又柳も萌え花も笑ひ草の青々と汀に満ちたるを。一人は好き景色とも想はず。又一人は好き景色よと想ひて。柳暖花融草滿汀とよみたらんには。則其境の佳と趣の佳とが合したるにて。前の人然らざる也。これと同じく江上に數峯青の妙境なれども。想が妙あらざる時の錢起の如く江上數峯青の句の出來得がたし。又荆公が月移花影は如何にといふに。之の妙境といはんより。柳暖花融草滿汀と同じく佳境と

いふ方當れるならん。又子厚の隔竹敲茶臼は。妙境にもあらす佳境にもあらす。これを真境といふころよからめ。誰しも隔竹敲茶臼をば。江上數峯青が如く妙とも思はず。月移花影が如く佳とも思ひざるべし。只睡が醒めし折柄茶臼の聞ゆるの其境の真なるめて。之を詩に入れんと思ふは。思の真なるにて。則其境の真と思の真とが合して隔竹敲茶臼の句は出しものならん。されば古人も詩境は妙と佳と真とありといひられたりき。されども初より妙境佳境真境といふ三つの境が別にあるにあらす。唯詩人の心の想が妙なれば妙境。忽ち生じ。心の趣が佳なれば其境も亦佳とある。心の思が真なれば真境自ら至るべし。されども此境は遇はざれば此心動かず。此心動かざれば詩句は出來ざるべし。こは少しく六ヶ敷ことどのやうなれども。筆の序にかきおく。

◎詠史

詩に詠史題あり。詠物題あり。詠史とは古今の人物を詠するなり。詠史の初學には六ヶ敷ものなれどもまた知らざるべからず。或は人物を議論えて中正に落すあり。或は其事實を其儘にのぶるか中に作意を含みて何となく味あるやうに作るあり。或は其事實の餘意を述ぶるあり。たどへば

王昭君

許忱甫

漢宮眉斧眉斧は眉に息邊塵夷狄とれ功歴豺貅 猛獸の名に百萬人。好把香て婦人の事 閨アソシシロイ 舊脂粉。淡粧濃抹上麒麟閨の名にて功臣の像を描きたる處

漢宮の婦人乃ち王昭君が邊塵をどめたる其功は百萬兵にも勝れり。されば其香閣に残れる處の舊用ひし脂粉を以て其像を麒麟閣に描きて。他の功臣とならべんとにて乃ち其人物を議論したるなり。其議論のよしあしによりて。其人の心術の底學問の力迄も現はるゝものなれ

ば。能く心を注がざるべからず。杜甫は武侯を詠じて。

伯仲之間伯仲とい優りもせず劣りもせざるをいふ 見伊呂伊尹太公望を云ふ 指揮若定失蕭參蕭何曹參を云ふ

といへり。孔明の伊呂の二人と伯仲の間人にて。功は漢の蕭參の二將よりも高からんと譽たり。此を千歳の好議論とせり。然るを薛能は

昔時諸葛成何事。唯應終身為臥龍。

孔明は唯一生臥龍となりて潜みて居ればよきにと。孔明を誇りて却て後の人に笑はれたり。慎むべき事なり。されども初學は輩は詠史は作り難く。よし作るども此等の事に構ふべきおはあらず。

王昭君

釋皎然

自倚嬋娟望主恩。誰知美惡忽相翻。黃金不買漢家貌。青塚空埋秦地魂。
塚とい墳の高さを云ふなり。胡の國の草は白さを唯昭君の塚の上のみ青かりしゆへ青塚と云ふなり。

昭君の唯自ら嬋妍によりて。君の恩寵を受けん事を望みて。畫工が美し

き姿を醜き姿に描きて美惡が忽ち相翻らんとは思ひもかけず。されば
畫工お黄金を賄はずして空く胡國の青塚に魂を埋めしにて。乃ち其
事實を述ぶるか中に作意を含みて悲慘の意言外に溢れたり。

王昭君

王之漁

夢裡分明入漢宮。覺來燈背錦屏錦の屏風にて空紫台地名月落關山界
美しきを云ふ
山にあり曉。腸斷君王信畫工。

夢裡ありく。と漢宮に行きしと思ひしが。覺れば矢張もとの胡國に
て燈背に錦屏のあるのみなり。折しも紫台に月入りて物淋しき曉な
れば。殊更に君の畫工を信せし事のくやしとなり。何故お悔しといふに
君王が畫工を信じて誠の醜女と思召すゆへ。かく胡國へころ來りつれ。
さもなくハ漢宮にあらんものと思へばあり。これハ作者が昭君の心
を察して。其情を委曲ツツカに述べたるものにて。此等を事實の餘意といふ。大

抵詠史は此三様の外お出せずと知るべし。又杜牧之が赤壁に

東風不與周郎便。銅雀臺の名にて曹操が宮人をおくところ春深鎖二喬。大喬小喬と云ふ
二美人の事なり

周瑜が謀を回らしたれども。折柄東風が吹かずば負軍となりて。曹操が
遂ふ彼の二喬を銅雀臺上に鎖さんとなり。此も事實になき事を推して
作りたるにて。即ち事實の餘意なり。み。には漢土の例をのみあげたれ
ども。本邦の人物を詠するも之に同じ。

◎詠物

詠物とは。草。木。を。咏。し。器。具。を。咏。し。又。ハ。鳥。獸。魚。介。を。咏。する。の。類。なり。詠物
の作は其物をいはずして其物たるの意あるを特によしとす。例之は

秋 柳

殘葉疎黃淡帶烟。略似春寒二月天。西風一段蕭條意。不若啼鶯只着蟬。
殘れる葉は疎に且黄色になりて淡く烟を帯びや。春寒二月の節此景

色のやう見ゆといへば。一柳字も一秋字もあけれども、己お何となく秋の柳のやうに見ゆ。又鶯はよく柳を咏むもれおて。古句にも兩岸雨収鶯語柳。また鶯聲在綠楊をどあり。此詩の後半は柳に常によく止まりし鶯の來らずなりて。蟬のみ來りて一段蕭條にて。こゝにも一秋字も一柳字もなければも。前半よりも秋柳なることは確かに見ゆ。かくの如く其物をいはずして何となく其物を見するころよけれ。

◎即興

佛閣神社にゆき。又の野遊酒宴あどの時に見る所の景色。または遇ふ所の感情をのぶるを即興といふ。即景所見又は所懐所思などの題は皆これなり。即興の詩は深く思を回らさずして。見る所の景をよく寫またるを第一とす。たとへば

看院只留双白鶴。入門唯見一青松。

院を見れば二羽の鶴が居り。門に入れば一幹の松が立てり。よて。見る儘の景をのべしものにて。即興の詩はこれ等を専らとするなり。又即興の詩にも思を回らして作りたるもあり。

塔ミキリ蟻相逢如偶語。園ミキリ蜂速去恐違程。

塔を行く蟻は相逢ふて語るが如く。園に遊ぶ蜂は急ぎ去て程を間違ゆるなどおて。同じく見る處の景を述べたるものなれども。思をめぐらしたるなり。すべて即興の詩は見る所逢ふ所の感情をその儘にのぶるものなり。されば畫れ如し。眞に逼るなどの評語は。多く即興の詩に下すものなり。畫の如し。眞に逼るとは。例之は野邊を牛の眠りたるは何の逸興もなき様なれども。

耕餘黃犢牛兒無入管。自上橫破綠處眠。

と妙手よ寫されて後初て趣を生ず。此等を畫の如しといふ。其意は田を

耕すことも終りて。農夫も黄犢に頼着せされば自ら横陂の草の青々と
またる處に上りて眠るとあり。又田舎の祭に農夫が酒に酔ふて歸るの
詩料にもなるまじき様なれども。

桑柘名木の影斜秋社散。家々扶得醉人歸。

と作られて後此の如き最も風流に思はるゝあり。此等を眞に逼るとい
ふ。其意の日は西に傾きて。桑柘の影も斜になりて。祭もすみ。家々で醉人
を扶て歸るとなり。

◎疊字

疊字とは漫々蕩々々々の如く。同じ文字を重ぬるをいふ。古人は双字と
もいへり。句中に此文字を下すは極めて難きものなり。尤も一二の句な
ぎに下すのみ六ヶ敷とにはあらぬと。三四の句殊々律詩の對句よ
至りて下し難きものなり。むかし李嘉祐の詩に

水田飛白鷺。夏木嘯黃鸝。

といふ句に。玉維が疊字を附して。漫々水田陰々夏木とせしより妙とな
れり。とぞ。此二句の見處は漫々陰々の二字にあればなり。そは何故にと
いふ。只水田に白鷺がとふといひ。夏木は黃鸝が嘯るといふのみみて
は。未だ事足らぬを。漫々水田といひ。陰々たる夏木といひてこそ始
めて白鷺がとふも。黃鸝が嘯るもことばりと聞ゆれ。之にて疊字を用ひ
て甲斐あると甲斐なきとを知るべし。又杜甫が

無邊落木蕭々下。不盡長江滾々來。

といふ句も其妙は疊字にあるべし。落木下り長江來るにてもよきやう
なれども。蕭々下るといふにて。落木の無邊を知り。滾々來るといふにて
長江の不盡を悟るものにて。見聞の形容しきたきを此疊字を下せしよ
り風味百倍せり。東坡が

澗々炉香初泛夜。離々花影欲搖春。

といふ句も、炉香の夜に泛び、花影の春を搖すにて足れるやうなれども、澗々すやうに炉香が泛び、離々て花影が搖くといふよりて、形容が妙になるなり。

◎連綿字

連綿字とは逍遙、悠揚の類より淋漓、寂寞などの字をいふなり。連綿字も疊字と同じく對句を六ヶ敷となす。

鬪鬪刷毛花蕩漾、鷺鷺拳足雪離披。

毛を刷ふの二字より花蕩漾といひ、足を拳ぐの二字より雪離披といふなり。蕩漾は波に物のた、よふ如くに物の乱れ動くをいふ。離披は物の散る貌をいふにて、此詩の連綿字を句末におきたるものなり。

窺人鳥喚悠颺夢、隔水山供宛轉愁。

これも鳥といふより悠颺たる夢といひ、山といふより宛轉たる愁といへり。悠颺は舉る良うつゝに遠く夢を見るをいひ、宛轉はまろぶ良。一つことを打かへして思ふをいふ。之は悠颺と宛轉の連綿字を句中に用ひたるなり。

又已を得ざる時は連綿字を顛倒して用ゆる例あり。然れども其理の害にならぬやう用ゆ。韓退之は參差を差參と用ひ、玲瓏を瓏玲と用ひたり。此等の所謂理此害にならぬものにて、上を下に用ゆるも下を上を用ゆるも、其心は同じ事なり。又江湖を湖江とし、慷慨を慨慷とせしむあり。されども退之の大才子大學者なる故、奔逸の勢に引かれて用ひたるものなれども、後進者の漫學ぶべからず、奔逸の勢に引かるゝとは、喩へば高き所より降りたる勢には餘程幅ひろき川をも越えらるゝものなり。さらば常に越え得らるゝかといふに、常に越られざるなり。唯高き處

より奔りたる勢にて其時は越えたる如く、詩句も奔逸したる勢には常に無理の文字をも用ひ得るなり。されば奔逸せぬ詩に固より無理なるゆへいかに作例ありども用ゆべからず、詩の勢にも熟せぬ人が漫よ之を用ゆるハ、鴉が鶴の真似をして水に溺るゝに似たり。されば鷓園雌黃といふ書にも、此等を學び行たらんハ、遂ハ麒麟を麒麟といひ、鳳凰を鳳凰といひ、草木を木草といひ、山川を川山といふに至らんと戒めたり。又機度顛倒しても苦しからぬ文字あり、羅綺を綺羅とし、圖畫を畫圖とする如きの類なり。

◎虚字

虚字は詩を作るに最も必要なる文字にて、句意の働きを付るは、ふれりよきいなし虚字とい

只今

如今

可憐

可恨

何似

何如

唯有

猶有	不用	不信	閒說	遮莫	誰知	無端
正是	疑是	莫嫌	莫厭	從來	近來	何事
底事	不管	不識	料得	想得	會得	分付

あとの類なり、又句を以て其例をわけんに、

何如種得梅花好、半入疎篔半入池。

閑窓渾未知春去、猶有薔薇一架花。

無端一夜空階雨、滴碎思鄉萬里愁。

白頭不識公候事、閑把牛經教子孫。

重字連綿字虚字などの事ハ、詩力の進むに隨て自らさとり得べし。

◎詩會の式

論語にも詩以て群すべしとある如く、心に逆ふ莫きハ友人など、相會して詩を作るハ面白く、且詩を鍊磨する上に付て益するどころも多か

らん。されば春は花さく里柳なびく園に菟を布き。夏は水の邊の樓松かげの床ふ袂をゆらね。秋は月に冬は雪に其折々れ景色を賞して會合をこそ催すなれ。

詩會の規式は和歌の會の如く。これと定れる例はなけれど。先其あらましをいはんに。或は前日より題を出しおくあり。此題は前よりよく思を回らして作爲し。其上各常に往來せる詩の先生あらば。其許にゆきて點削を乞ひたる上清書して出席すべし。又會によりて其席ふ列りたる先生に見せて。當坐に點削を乞ひ詩の評論疵病等を各に悟らえめ。後學の爲にするもあり。先生に見するよは一首のみは失禮ゆへ。可成二首なり三首なり作りたる上。其中にて好きを一首撰ばれんことを乞ふこそよけれ。又衆議判といひて定れる師もなく。連衆の中にて互に議論し。の上にて清書するもあり。又尋常の詩會にては必ず當坐に題を出すもの

もへ。何にても韻書一卷を携へて行べし。さもなくば初學の人の苦むものなればなり。又主人より貸與するも常の事なり。そべて席に臨みては行儀を刷ひ談話を高聲にするなく多言するなく。只沈吟默思えて風情を求むべし。忽々しくての好詩の出來ず。又我詩は早く出來たりとも満坐れ人れ未だ出來ざるうちは起居すべからず。雜談遊戲は勿論れ事なり。己も満坐の詩も清書終りたらば。其會の主人は其詩箋を集めて文臺の上のせ。先生の脇坐に就きて唱すへしや否やを問ひ。其連衆の中にて詩の力もあり。吟聲のよき人に譲るべし。讀畢りて退けば主人起て文臺を床或の棚の上に置いて退く。ふれ詩會れ一通りの式なり。會の席又は床に相應れ圖畫などを掛くべし。或の瓶花を挿み琴書を飾るも一興ならん。

◎詩會にて詩を案する心得

已に當坐の題も定り、各罷を撚り好詩を作らんと思ひて沈吟するども、詩境が生ぜざれば詩の出來がたし。此境を知らずして思をこめ口を賦する際に、已に傍にて詩も出來たれば、先生の批刪を乞はんとて筆視を鳴せば、我遅れたるを愧る心切に迫りて、愈作り濫りてあしき詩を作るものなり。されば吾分を知りて察するころよけれ、喩へば碁の巧者は沈思するよ隨ひて、よき手を出せども、下手の者は如何程案してもそれ丈の好手を打出す能はず。却てあしき手をさへ出すことあるが如し。もし松間賞月といふ題の出たらんに、若し其會席の庭中に松樹ありて、前ふ月影は映るを見て、よき詩料よと思ひて、此題を出したるなれば、外へん思をつけず、先見る所の景色を真よ通るやうに寫さんことを願ふべし。前に即興の詩に付てさとしたる處を見合すべし。又さもなくて唯この題を出したるなれば、作意も一ならず、思を運し趣を求むべし。或は

湖邊海濱或は山中野外何れにてもよけれども、庭前の見る處に就て出したるならんには、苦吟するは益なき事なり。されども同じ松月にても春なれば松の榮に向ふ休より月の朦朧なる氣味、夏あれば松の繁れるより月の清涼を愛ま、秋なれば松風高く月の凄き氣色、冬なれば松は貞節を賞し月は凛冽なる様を、其折々によりて眼につけ處も異なるべし。中には當坐の人々同じ庭前は景色に付てよみ出んに、其句も相似んど思ふなるべけれども、皆各其詩力は階級によりて思想も大よ違ひ、かりまた大抵は似たる作も、一二字の違ひによりてその風味を異にするものなり。又餘に景色よき處の氣が散りて、詩句の出來難きものなり。されば假令詩境は多くとも、初め作意をつけたる景色、お若て始終其詩を作り立つべし。初學の人、茫然として趣向の着處に迷ひ、少し時に慣たるもれば、一首漸く出來上らんとすれば、其境をよららずとて、又他

の吟料を求むるものなり。されども却て初ふ増したる好き趣向は付ずして。不満ながら初の句を出すことあり。此の如き時は好句は出来ぬものなれば。慎むべきことなり。

◎題を定むる法

詩會にて當坐の題を定めんと思ひ。其中の師匠に乞ふべし。もし題が新奇なれば必ず詩句も好趣あるものなれば。題のよしあしは大事れことなり。或は時の風景或は坐の逸興に牽^{ヒカ}れて始より一定すべからず。譬へば其會の主人新宅に移りて。其庭に松を種たらんには種松などの題もよからん。又竹叢に隣りたる處に移居したらんに竹林卜居などの題もよからん。或は新婚新誕或は旅行送別など何事に限らず斟酌あるべし。又恒の會にては。其會の席の景色を見て時節に相應せる題を出すべし。花樹竹草假山貯泉より琴棋書劍酒茶等。主人の嗜好にいたるまで

皆時の興に隨ひて見合すべし。今はむかし貞享年間深川のあり處に詩會を催したるとき。頃々冬の事にて景色も寂寥れ折柄。唯細き川前に當りて流れ。其水を隔て小丘あり。其上に二三株の松あるのみにて外に見る所なし。上座へ題を乞ひしに暫く頭を傾けて疎松隔水といふ題を出さる。此ハ杜甫の疎松隔水奏笙簧の句を截りたるものなるが。其境は叶ひて殊の外興を催せしとぞ。此等を時の興に隨ふとはいふなり

◎韻 礎

韻礎とい席上にて何の字を押すべしと極めて作るをいふ。又獨吟の時にても之をなすことあり。絶句にても。律詩にても。大抵結句の韻に押すべし。礎といハシズへと韻む字にて。家を建るお先石をすへて後に柱を立て壁をぬるに同じき故。礎といふなり。凡韻礎を定むるにハ一概にいへねども多くは體のある字を用ゆるものなり。或は禽獸器財天象等

其題によりて定むるものなり。又分字よて韻礎を定むる事もあり。分字とは古人の句を分ちて韻となすにて。たとへば五人の時あれば。花塙夕陽遅しか。江清月近人などの句を分ちて。甲は花字乙は塙字丙は夕字丁は陽字戊は遅字なるが如し。又四人なれば鶯傳舊語か。江上月明なぞの句。七人なれば人倚梅花雪意深か。滿地落花春日長なぞの句の如し。今韻礎を定めて三四人が作りたる例をあげんに。

花同歳々人還異。惆悵今春添髮星。髮の白きをいふ

此首は賞花の題にて。星字を以て韻礎となしたるも此あり。以下は詩も亦皆之に同じ。其意は花の年々かはらぬをも。人は年々に髮星を添へることの憂しと歎きたるにて。年々歳々花相似。歳々年々人不同といへる古人の詩より思ひつきたるものなり。

但向花前須取醉。回頭歲月似流星。

友と共に花前に酔ふに勝ることなし。頭を回して思へば歲月の遷るは天に流る、星の如くに早ければ。何を營みても其甲斐なしとなり。

樹底春風暮前起。三句句は十日三句は三十日の事花事半零星。明方又星の光の自と薄る、を云

風が暮前に起りて。待かねし三句の花も零星の如く。ふなりぬと歎きたるなり。

對花可惜隔年別。花は來春ならではさかぬ故年を隔つる別といふ不妨歸途每戴星。星を戴くとは夜も入る事

隔年の別の名残を惜むゆへに。歸途星を戴くとも更に妨げとは思はぬとなり。

對花好約多春去。樹外幾經霜與星。霜と星とは星霜の語を分たるにて霜の朝のもの星の夜のもの猶朝暮の如し

花と對して毎年見あ來ることを約したれば。又幾年か此樹外にて星霜を經るとなり。かく何れも星字を韻礎となしたるものなれども。或は星といひ。或は流星といひ。或は零星といひ。或は戴星といひ。或は霜與星

といひて、同じ星字を押したるものどへ思へぬ迄其姿を殊にせり。かく各趣向をつけて其押すべき字を働かせて用ゆるる。殊によけれもど此韻礎を定めて作る所以のもの。其作者の文字を取まはす働きを見んとなれり。其韻礎の字を虚と押みては詮なし。かくいへば甚だ六ヶ敷もの、やうにて。初學の輩はとて出来得べからずと思ふ人もあらんが。その心得違あり。世に諺に噎を懲りて食を癢すといへるが如く。噎はいやなれども。若し食を癢したらんには飢死をへし。夫と同じく韻礎は六ヶ敷などなれども。此位の事を出來ずとて癢す時にとて詩人の域に入ることば出來ざるへし。されは少しの噎ぶども飢死するに勝れりと思ひて勉むるよき。されども如何に働かせて用んどもおもふども徊、岫、嶺、復などの字ならんには。徊の徘徊、岫の嶺岫、嶺は嶂嶺、復は彷徨、などよりほかに用ひやうなきゆゑ。こは詮方なし。又初學の人は、春秋、來、行

などの字は押まやすきやう思へども。此等の字は却て活動せぬ字ゆゑ意を廻し難し。されり詩に功を積むに隨ひて。平易の字を苦吟するものなり。古昔宋朝に冠萊公といふ人あり。僧の惠崇と池亭にて分字をして詩を作らる。萊公は柳といふ題にて青の字を得。崇は鷺といふ題にて明の字を得たり。かくて午より晩まで案じて。漸くにして崇打うなづきて詩漸く成れりといふ。萊公試に吟過せよといへば。崇はふ詩は五言の八句なるが。後聯に明字を押しんと思ひて五度作り直したれども意に満ざりしが。漸くにして成れり。其句は棲烟一点明なり。此詩は只此句の明字に功はあるならん。と。萊公笑て曰ふ。予も青字が干要なりと思ひて。四度作り直したるも心に落ちず。とて思ふ儘の句は成らざる故作らざるが勝れり。とて罷みぬ。と。此事に付ても古人の用意の深きを見るべし。凡鷺の題にて明字を得れば。雪毛明とか片翼明とか作るか。又はその住

む處の池よよせて。池水明とか波影明とか作らば何の難き事かあらん。されどもかゝらんには明字が働かざるなり。然るを接烟一点明といへば。明字が活動するなり。うは何故といふ。一点明といふ斗りにて。なは活動せぬを接烟といふ二字にて明字も活するなり。驚の元來潔白なる物ゆへ。池の水烟の内に居れば。池の物はねぼろにて見分けがたきに驚ありく。と見ゆる故。猶もつて明なるもれど。知らるゝといふ心から一点明といふ句が働くなり。唯明といふに。あらずして。烟に接てより明と知らるゝ。といふ故に活動するなり。又柳は題にて青字を得れば。殊に押易き好字なりと思ふべけれど。さあらず。大抵は押得て活動せぬ故。萊公の作者さへ作らずして罷られたり。此を働かぬ文字にて押たらんに。何の興かあらん。たゞ韻を定めて作る。といふまでの事なり。されば詩の活句活字と死句死字の辨を知らざるべからず。喩へば生た

る人と木偶の人。如し。其見たる所にて。些スゴンの相違なく。耳目鼻口もよく具りて。それか。とまがふは。とあれども。熟看し來れば。木偶の人。に精神なきゆへ。隨て生氣といふもの。少しもなきが如し。かく詩にも。活氣ある。となきとあるもの。なれば。ろを見分る事。ころ緊要なれ。

又人の韻を和するも。韻礎を定めて作るも。其心を用ゆるは。同一なり。和韻とい人の作りたる詩。と同じ韻字を用ひて作るなり。又次韻といふ事あり。次韻の和韻と同じ事なれども。和といふ時は。本詩の心を受けて接拶か返答をするなり。次といふ時は。只其韻をふみたる迄にて。詩の心は何にても作るなり。

初學作詩法畢

文林閣出版物廣告

日本詩文雜誌

日本詩文雜誌は江湖雅君の文詩歌俳を蒐集し以て斯道の熾昌を期するもれなり而して編輯の人々は現今文壇上有名の諸先生なり

日本詩文雜誌は去る明治廿二年に第一號を發行してより以來毎月必ず發行し曾て延刊休刊等せしことなく社會の信用を博したる我國第一の詩文雜誌なり日本詩文雜誌の定價一冊四錢郵税五厘六冊(三月分)前金二十五錢ふして毎月一日十五日の二回に發行す

言葉の花

言葉の花は江湖雅君の國文和歌を掲載する雜誌にして編輯の人々の鈴木重嶺三田葆光橘道守の諸先生を始め現今有名の諸先生あり

言葉の花は昨二十五年七月に第一號を發行してより以來毎月必ず發行し兼題別題歌合等の募集ありて我國歌學雜誌中尤も隆盛を極めたり
言葉の花は定價一冊金六錢郵税五厘五冊(五月分)前金三十錢十冊(十月分)前金五十八錢二十冊前金壹圓拾錢にして毎月一回二十日に發行す

正三位伯爵勝安房公題字
從五位鈴木重嶺先生題詠

金玉歌集

定價郵税共 金十五錢

右は明治歌人の金玉なる和歌を集めたるものなれば歌を學ばんと欲する人の必ず一本を携へたまへよ

栗本鋤雲先生題字
嵩古香先生題詩
村田鶴汀先生題詩
石崎篁園先生序文

金玉詩集

定價郵税共 金十五錢

右は明治詩人の金玉なる詩を集めたるものなれば詩を學ばんと欲する人の必ず一本を携へたまへよ

作詩自在

定價郵税共 金十二錢

右は詩の作法を教へし書にして初學作詩法より少しく高等なる書なり

大庭爲道先生著

作歌自在

定價郵税共 金十五錢

右は大庭先生が歌まなびの人の便を計り數年の困苦を経て著されたる作歌秘訣書にして和歌を學ばんとする人此書を一覽せば師に就かずして自ら悟り得べし

太田華陰先生序
山田天籟先生跋
石崎篁園先生著
齋藤樂堂先生著

東都三十勝記

右は篁園樂堂の兩先生が流麗圓轉の筆を以て東都の三十勝を記されたる近來未曾有の好著書にして定價郵税共金七錢也

兒島高德公

眞筆額面

右は有侍の二字を書かれたるを今般出版し定價郵税共金五錢にて發賣す續々御注文を乞ふ

發行所

東京市神田區五軒町廿番地

文林閣

明治廿六年三月六日印刷
同 年同月 十日出版

定價金十錢

編輯兼發行者

彌石門之助

東京神田區五軒町二十番地

印刷者

高田安次郎

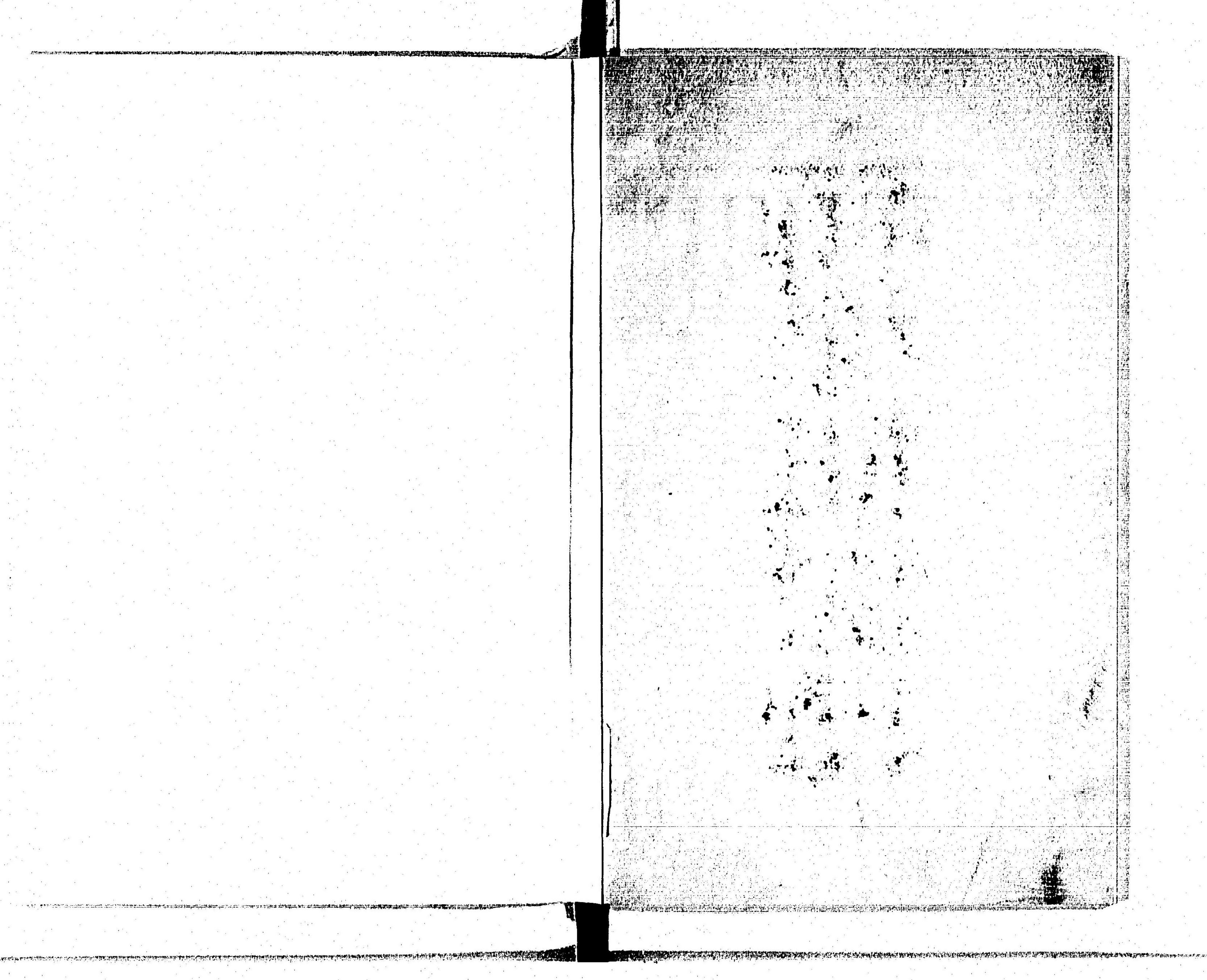
東京日本橋區鱸壳町一丁目三番地

東京神田區五軒町二十番地

發行所

文林閣

大賣捌所 ● 東海堂 ● 巖々堂 ● 上田屋支店 ● 東京堂 ● 武藏屋





1

1

特 16

777

初学作詩法

国立国会図書館

098463-000-4

特46-777

初学作詩法

後藤 楽山 / 編

M26

DBV-0234

